

令和 6 年 5 月 18 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00142

研究課題名(和文) 弘田龍太郎の童謡創作とその文化史的文脈

研究課題名(英文) Ryutaro Hirota's creation of children's song and its context of cultural history

研究代表者

大地 宏子(OCHI, Hiroko)

中部大学・現代教育学部・准教授

研究者番号：80413160

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、知名度に比べこれまで本格的な研究がされてこなかった弘田龍太郎につき、作品目録や伝記事実などの基礎データを整理し、大正童謡の音楽様式を分析し、大正から戦後まで日本の中流階級の意識を規定することになる「よき家庭のよき音楽」の理念との関係を問うた。弘田の活動は、邦楽取調掛に勤務する傍ら新日本音楽運動にも関わっていた第一期、北原白秋との交流から童謡の作曲を開始し、大正新教育運動にも参加するようになった第二期、ベルリン留学以後のラジオ放送などにおける啓蒙活動が増える第三期、戦後の第四期に大きく分けられ、ベルリン留学後に再び取り組んだ仏教音楽作品は弘田の最も充実した創作期に当たった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大正童謡の最も有名な作曲家の一人でありながら、弘田龍太郎については本格的な研究書はおろか作品目録すら整備されず、伝記も書かれていない。彼は仏教音楽や舞踏音楽なども残したが、これらについてはまったく未調査であり、創作の全体像の中で童謡作曲を位置づけることが難しくなっていた。本研究ではこれら多岐にわたる諸活動を整理したうえで、弘田の音楽様式を社会的文化的文脈の中で理解すべく、これらの背景との接合点を探った。弘田の折衷的で堅実な様式は、新中間層が抱く民衆的大衆的なものへの忌避感、西教的教養への素朴な憧れなどに訴えるもので、それは新教育運動と教養主義的な芸術理想は深く結びついたものだったといえる。

研究成果の概要(英文)：This study examines Ryutaro Hirota, who has not been studied extensively despite recognition of his name. Specifically, this study (1) creates basic data such as a catalog of works and biographical facts, (2) analyzes the music style of children's songs in the Taisho period, and (3) examines how the above relates to the philosophy of "good music for a good family," which defined the consciousness of the Japanese middle class from the Taisho to the postwar period.

Hirota's activities are broadly divided into four periods. In the first period, he was involved in the New Japanese Music movement while working at the Hogaku Chosa-gakari. In the second, he began to compose children's songs and participated in the Taisho New Education movement. In the third, his educational activities through radio broadcasts and other means increased. The fourth period began after the war. During his most substantial productive period, Hirota took up Buddhist music again after he returned from Berlin.

研究分野：音楽教育史

キーワード：弘田龍太郎 赤い鳥運動 大正新教育 大正教養主義 新中間層 工場音楽 邦楽調査掛 仏教音楽

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の出発点は、「大正童謡にとって弘田龍太郎の音楽様式がどのような点で規範的であったか?」という問いにある。一口に童謡といっても作曲家ごとにスタイルはかなり違い、山田耕作のそれは極めて実験的であり、中山晋平は民謡風の要素を全面に出したのに対して、弘田の作風は「ハイカラにしてノスタルジックな中庸」、つまり洗練されたヨーロッパ的和声と邦楽的な旋律との折衷を特徴とする。童謡の主たる受容層は大正期に爆発的な増加をみた都市郊外のいわゆる新中間層であったが、西欧文化への憧れとデラシネ的郷愁というアンビバレントな心情に訴え、かつブルジョワ的中庸を守るという点で、弘田のスタイルは大正童謡の一つの典型と見ることが出来る。

本研究がとりわけ注目するのは弘田の創作活動の文化的広がり、すなわち大正新教育の諸潮流との関わりである。北原白秋を通じて農民美術運動で有名な山本鼎らと知り合った弘田は、島崎藤村や内村鑑三らも会員だった日本自由教育協会に参加、大正期に日本に紹介されたダルクローズのリトミックにも関心を持ち、恐らくこの関係で舞踊家の石井漠らのために作品を提供、戦後になると新自由教育の中心だった成城に自ら幼稚園を設立し、その開設にあたっては山本鼎らが協力した。つまり、「弘田の活動は大正期の芸術教育の理想が戦中の中断をはさんで戦後に開花するプロセスを示唆するのではないか?」という問いが、本研究の第二の出発点となっている。

2. 研究の目的

(1) 作品目録の作成と伝記的事実の調査

大正童謡の最も有名な作曲家の一人でありながら、弘田については本格的な研究書はおろか作品目録すら整備されず、伝記も書かれていない。彼は仏教音楽や舞踏音楽なども残し、ラジオ放送の企画構成に熱心に取り組んだが、これらについてはまったく未調査であり、創作の全体像の中で童謡作曲を位置づけることが難しくなっている。弘田の音楽作品の様式変遷を辿るにあたっては基礎資料の整備が不可欠である。

(2) 弘田童謡の音楽様式の比較分析

「機能と和声と邦楽的要素の媒介」という視点からの弘田童謡の様式分析をおこなう。弘田の童謡は既述のように、あくまで機能と和声を骨格にしつつ、随所でそれを五音階と巧みに折衷させる。ピアノ伴奏は当時の基準でいえばかなり難しい。つまり洋風で「きちんとした」イメージに適度に日本的な香りを添え、かつ効果のあがるピアノ伴奏によってハイカラ・イメージを喚起するのである。大正童謡の作曲家たちの音楽様式については、金田一春彦による極めて示唆的な分析があるが、それ以後ほとんど研究はすすめられていない。

(3) 弘田童謡の音楽様式の社会的文化的背景の解明

(2)の音楽様式分析の結果を社会的文化的文脈に接合する点にあり、それに際して中心となるのは、弘田の折衷的な音楽様式がどのような社会層を意識していたのかという問いである。弘田自身が音楽様式を社会階層と結びつけて考えていたことは、数々の著述から明らかである。周知のように大正童謡の主たる受容層は、いわゆる都市郊外に住む新興ブルジョワだった。私鉄沿いに開発された新興住宅地に一戸建てを構えた彼らは、ヨーロッパ的教養主義に憧れ、子供の教育に熱心に取り組んだ。その顕著な例が成城小学校や玉川学園などで、当時ドイツで流行していた新自由教育が真っ先に導入された。その成城の地にゆかり文化幼稚園を創設した弘田の折衷的で堅実な様式は、戦後に至るまで日本の中流階級の意識を規定することとなる「よき家庭のためのよき音楽」の原型であり、新中間層が抱く民衆の大衆的なものへの忌避感、西欧的教養への素朴な憧れ、プチブル的な中庸のエートスなどに訴えたのではないかと推測されるのである。この仮説を検証するのが、本研究の最終的な目的である。

3. 研究の方法

(1) 本研究の基礎となるのは作品目録の整理である。これに関しては 1. 大正期の児童雑誌の調査により出版年を特定 2. 明治学院大学の日本近代音楽館蔵の遺稿より未出版作品を調査(舞踏音楽など) 3. NHK 放送博物館所蔵の戦前の番組表に基づき弘田が出演したラジオ放送および内容を整理 の三つの作業を行う。

(2) 様式分析にあたっては、機能と和声をどこまでどのようにして旋律に反映させているかを中心に、他の作曲家と比較しつつ、その様式変遷を辿る。

(3) 既述のように本研究においては、上の様式分析を社会的文化的文脈と接合することが重要になる。つまり弘田の様式がどのような聴衆層を想定していたか、童謡の初出雑誌およびコンビを組む詩人の選択についての統計調査に基づいて明らかにする。また、音楽様式研究を広く文化的文脈の中で理解するために、弘田の思想的背景の調査が不可欠である。上述のように弘田はしばしば、「中流以上の家庭のためのよい音楽」という物言いをしており、彼の著作を網羅的に調査する必要がある。彼と交流のあった北原白秋、山本鼎、小松耕輔らの資料から、弘田についての記述を拾い上げていくとともに、弘田が成城に開設したゆかり文化幼稚園での聴き取り調査も行う。

4. 研究成果

(1) 作品目録の作成と伝記的事実の調査

弘田の著作について、著述と楽曲のそれぞれを図書/雑誌別に収集・整理し目録を作成した。なかでも邦楽調査掛において弘田が取り組んだ邦楽の五線譜化事業（再調査と浄書をおこなった作品）の全容や、これまでほとんど公開されていなかった仏教作品の多くを収集し明らかにすることができた。ただし、日本近代音楽館所蔵の弘田龍太郎文庫については同館の資料整理が行われて（目録が作成されて）いないため、未公開の手稿譜等が相当数遺されていることが推測される。

(2) 様式分析

弘田は童謡の他に新民謡や新日本音楽、舞踊曲、工場音楽等、様々なジャンルの音楽作品を遺した。上述のように、東京音楽学校内に設置された邦楽調査掛の調査員として従事していた頃に採譜し、五線譜化した邦楽曲も数多い。なかでも弘田の最も充実した創作期に書かれた仏教音楽作品は、弘田の創作の全貌を明らかにするうえで非常に重要である。

弘田の創作人生の中で仏教音楽作品は、およそ次のように位置づけられるだろう。幼児や子どもを対象にした単旋律による童謡から出発した彼は、やがてルンビニー合唱団を想定した、青少年を対象とする二部～四部による多声部の合唱作品を書くようになり、ドイツ留学を経て、パドマ合唱団におけるヨナ抜き音階から脱却した壮大なオペラ作品「仏陀三部曲」の構想へと至る。これら仏教音楽作品（主として合唱曲）にみられる音楽様式に着目すると、当初はヨナ抜き音階による童謡調の作風が、徐々に半音階を積極的に使用した不安定な調性感があらわれ始める。ベルリン留学後の代表的な作品「仏陀三部曲」においては、広い音域を駆使したピアノ伴奏は奏法的にもかなり難度が高い。特に二度をぶつけた不協和音が頻出する点など、荒々しいオクターヴやトレモロとともに、弘田がベルリンで知ったであろう同時代のモダニズム（ストラヴィンスキーやヒンデミットら）からの影響が顕著であり、以前の作風からは想像もつかない「現代的な」響きを志向している。

(3) 弘田童謡の音楽様式の社会的文化的背景の解明

弘田の音楽様式がどのような社会層を意識していたのかという社会的文化的背景を解明すべく、山の手「成城」文化に着目し、その接合点を以下の観点より研究した。

第一に、戦前の女性雑誌に掲載された弘田の著作を通じた彼の音楽観について。弘田の著作が集中して発表された1920年前後の大正期から昭和初期は、大都市を中心に新中間層が生まれた時代と重なり、彼の著作の多くを掲載した女性雑誌はこの新中間層を主な読者層としていたため、彼の著作は彼女たちを啓蒙する意図を持っていたと考えられる。家庭音楽に満ちたあふれた西洋と、音楽をたしなまない日本を対置する論法は、当時の音楽界にしばしば見られるものであったが、典型的な大正教養主義者の弘田が主張したのは、西洋音楽を娯楽としてではなく「教養」として身につけることだった。また、新中間層がもつべき音楽趣味について、音楽ジャンルと家庭階級との関係を類型化で示した彼の音楽観は新中間層の教養主義的な西洋音楽崇拜と深く結びついていたことが浮き彫りとなった。

第二に、東京都心の新中間層が多く集った郊外住宅地 成城（で形成された文化）と弘田の音楽観に通底する心性を示唆することを目的に、新教育を実践する実験校として最も注目された成城小学校の音楽教育と、小学校へ子女を通わせる保護者たちの芸術教育観にみられる大正教養主義者の嗜好を明らかにした。すなわち、芸術自由教育を支持した同校の音楽（歌唱）教材には既存の文部省唱歌ではなく弘田の童謡作品を用いていたことや、児童らの家庭ではピアノによる洋楽（西洋音楽）嗜好が最も多かったことから、成城小学校の保護者と弘田の音楽観に通底する大正教養主義は同方向であり、成城文化的なものとして結実したことが考えられた。

以上が研究目的に沿った研究成果である。他に、とりわけ研究目的(3)に関わる成果を以下に挙げる。

・工場音楽について

工場労働者にレクリエーションを与え教化すべく音楽を与えようとする取り組みで、十五年戦争に入った1930年代末から総動員体制の一環として盛んになった「厚生音楽」の前身と言えるべきものである。弘田が工場音楽に関わったのは比較的短期間であるとはいえ、一般に知られる童謡作曲家が「赤い鳥運動」と同時期にこうした活動を行っていたことは興味深い。作詞家、翻訳家として活動するかたわら日本初オペラの創立に尽力した小林愛雄は、工場音楽の主導者としてもこれに深く関わり、弘田は1920年頃から小林に協力する形で工場音楽の作曲を始めた。富岡製糸場における北原白秋との工場歌の他、制作した楽曲はそれほど多くはないが、新民謡風の和洋折衷的な音楽をめざした。弘田自身はどちらかといえばブルジョワ的教養主義者であり、決して国家主義的な考え方の持ち主ではなかったが、短期間とはいえ工場音楽の創設に真摯に努力した。

・邦楽調査掛における邦楽の五線譜化作業

明治40(1907)年、東京音楽学校に邦楽の研究機関として設置された邦楽調査掛の主たる事業は、日本伝統音楽の蠟管録音と五線譜化であった。弘田龍太郎はこの邦楽調査掛の調査員として邦楽の五線譜による採譜・記譜作業にあたり、とりわけ再調査と浄書に尽力した。本研究では弘田の邦楽調査掛における記譜作業の全容を明らかにしたうえで、弘田の再調査と浄書に着目

し、それらの経緯と彼の浄書した楽曲の一覧を整理した。雅楽をはじめ 12 種目の五線譜化に携わり 80 曲以上の浄書譜を完成させた弘田が、邦楽の五線譜化に強くこだわった背景には、普遍的言語として西洋音楽の五線譜に記すことによって日本伝統音楽の近代化をはかった邦楽調査掛の国威発揚的な政治風土があったことが浮き彫りとなった。

・ベルリン在外研修期間（1928～29年）の研究

弘田が研修のために在籍した教育研究機関名は、現在のベルリン芸術大学の前身、国立音楽高等学校 (Staatliche Akademische Hochschule für Musik) で、弘田はここに在籍していたウォルター・グマインドル (Walter Gmeindl) 教授に師事し、当時のベルリン文部省の音楽局長レオ・ケステンベルク (Leo Kestenberg) と会談していたことがわかった。また、ベルリン滞在中に現地の新聞 Vossische Zeitung に弘田の論稿「日本の民謡 "Japanische Volkslieder"」が掲載され、世界的名声の高い作曲家たちに日本音楽が正しく理解されていないこと、すなわち芸者の音楽と民謡が混同され、日本音楽 = 芸者音楽と誤用されていることを指摘したうえで、芸者音楽ではなく、素朴な日本人の魂を歌った真の民謡を傾聴すべきと強調している。これは社会階層と音楽的趣味 (ジャンル) を結びつける弘田のこれまでの主張と通底するものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 大地宏子	4. 巻 15
2. 論文標題 成城文化と弘田龍太郎の音楽観 成城小学校の音楽教育と芸術教養に対する保護者への調査結果を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部大学 現代教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 大地宏子	4. 巻 14
2. 論文標題 邦楽調査掛における弘田龍太郎の記譜作業について 再調査と浄書を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部大学 現代教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 大地宏子	4. 巻 869
2. 論文標題 書評と紹介 佐藤慶治著『翻訳唱歌と国民形成 : 明治時代の小学校音楽教科書の研究』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 103-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 大地宏子	4. 巻 13
2. 論文標題 女性雑誌にみる弘田龍太郎の音楽観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部大学現代教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 49-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大地宏子	4. 巻 第12号
2. 論文標題 弘田龍太郎と工場音楽	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部大学現代教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大地宏子	4. 巻 17
2. 論文標題 弘田龍太郎と仏教音楽 ルンビニー合唱団とパドマ合唱団をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------